

第3回奈良市教育振興戦略会議の概要

開催日時：平成26年11月20日（金）9時00分～11時00分

開催場所：日本都市センター会館 603号室

出席者：委員 柴崎洋平（フォースバレー・コンシェルジュ代表取締役社長）

委員 藤沢久美（シンクタンク・ソフィアバンク代表）

委員 藤原和博（教育改革実践家、元杉並区立和田中学校校長）

委員 松田悠介（Teach For Japan 代表理事）

委員 毛受芳高（一般社団法人アスバシ教育基金代表理事）

仲川げん（奈良市長）

中室雄俊（奈良市教育長）

1 挨拶（奈良市教育長 中室 雄俊、奈良市長 仲川 げん）

2 議事

（1） 前回のまとめの確認

【毛受議長】

- 前回までの議論で、「世界で勝負できる人材の育成」、「ICT教育・映像を活用して主体性を育てる」、「高校生以上にリンクするようなキャリア教育・トラッキング」、「学校支援地域本部のバージョンアップ」、「教育の質、基金の設立」、「教員の質をどう高めるか」、「自分の支えとなる部分を作るような教育」というような提言をいただいた。
- 今回は、奈良市としてどういったことを課題として考え、どういった対策をしていくのかについてお話し頂き、議論をしていきたい。

（2） 奈良市の教育について

【仲川市長】

- 今の社会の要請、産業界の人材要請、これからの社会を担っていく人材を育てていくことを考えたときに、革新性という点においては出遅れている。
- 教員の意識、能力、役割を大きく変えていかなければならない。
- 主体的な学びを育てる教育にシフトしていくべきである。
- カリキュラムの変更も必要だし、それを運営していく教員の資質、スキルを変えていくことも必要。場合によっては、そこで担いきれない部分を外部（地域人材、専門分野の人材）と連携をして、学校の教室と実社会をつなぐことを考えていく必要がある。
- 小学校の先生は小学校の6年間しか見ていない。中学校の先生は中学校の3年間しか見ていない。子どもの人生を見たときに、0歳から18歳まで、一貫した教育の考え方、シームレスでつないでいく必要がある。
- 実社会や産業界からの要請に応じて逆算をした教育を行うことができていない。また、フィードバックをしていく仕組みを作っていくことが重要。
- プラン1～プラン5までまとめているが、前回までに議論いただいている内容であり、すでに奈

良市が取り組んでいることもあれば、これからやっていくべきものとして象徴的に抽出させていただいた。

【中室教育長】

- 15年、20年先の社会がどうなっていて、今の子どもたちがどのように活躍しているのかを、委員からの意見をいただきながら、奈良市の教育を作りたいと思って会議をスタートした。
- 委員から、道具や手法を提案しているのではなく、教育の在り方、授業の在り方、教員の役割をどうするんだということを聞き、ハッと気が付き、腑に落ちるところはそこなんだと感じた。
- 外から日本、奈良の街を見るような子どもたちを育てれば、奈良を見ることができる。
- 教員の質について、課題意識を持っている。教員の意識改革については全国的な課題でもある。
- ALTを活用した「イングリッシュ・デイ」を見てきたが、小2の子どもたちは肌感覚で触れ合っていく。子どもの感性は、こんなところを揺さぶるとこうなるんだと感じた。
- 若い先生は、新しい手法について自分で切り拓いている。一方で、紙と鉛筆で十分という教員もいる。こういった状況に、どう切り込んでいくのが課題である。

(3) 「奈良市の教育について」を基にした議論

【毛受議長】

- こうやって、市長と教育長が話をしながらコンセンサスを作っていくというプロセスが、これからの教育で必要となってくる。
- ボウリングで言うところの「1番ピン」は何なのかというところ。どこを中心に倒したら、いろんな課題がクリアできていくのか。1番ピンとして、大きな四角で囲んだところがあり、どういった課題に基づいて1番ピンと言っているのかが3番に書かれている。そして、それらの課題がクリアされたときに、どんな子どもたちが育つのかということが1番に書かれている。そのためボウリングの球がプラン1～プラン5。
- 今日は、この紙について議論を深めていき、刺激的なものにしていきたい。

【藤原委員】

- プラン1については、自治体と教育委員会の覚悟次第である。覚悟がないのに、途中でやめるわけにはいかない。
- 先進地でも、恐る恐る始めている。

【松田委員】

- 覚悟っていうのは、お金の部分に加えて、何年かやり続けてエビデンスをとりながら、PDCAサイクルを作るシステムを構築することも含めて、覚悟なんだろう。
- 総合学習も、なんとなく学力が下がったという議論につながっているが、素晴らしい授業をしている先生がいる。少人数学級も、少人数にすることがダメなのではなくて、やり方、改善の仕方、その仕組みがなくて、単に人数を減らせばいいというものではない。
- 今後、どういうビジョンで、どういうファクトを集めながら、改善し続ける仕組みを作るのが重要。

【藤沢委員】

- プラン1～プラン5は、どれも素晴らしいと思うが、縦軸があってもよい。それがPDCAだし、学力じゃない軸を開発していく。

- 教員に対しての施策があってもよい。不安感を持ちながら子どもに接するのはよくない。
- 0歳～18歳のシームレスのプログラムが、これらのプランとどうつながっているのか。

【藤原委員】

- 教員の負担が増えるのはプラン1、4。
- ビルドビルドビルドではなく、最初に、ガサッと負担を減らしてあげるの大切。それが一番に出てくるとやる気が出る。現状であれば、文書業務。
- スクラップ&ビルド。衝撃的なスクラップが必要。

【松田委員】

- “多忙感”が言い訳になっている。いかに現場の教員が考えているかを抽出する必要がある。
- 何が具体的に課題なのかを把握するために、調査を進めていきたい。
- 本来であれば、目指すべき姿から逆算なのだろうが、それであれば現場に即していないものになる可能性があるので、現場の教員がどう考えているかからスタートしたい。
- T F Jのビジョンが「教育格差の連鎖を止める」である。今回の事例が先駆的なものとして、日本に広がっていくことを期待している。

【仲川市長】

- 「教員の指導力の差」について、0と100なのか、40と60の差なのかははっきりしていない。また、「現場が多忙」についても、どういう業務にどれだけ時間がかかっているかということが明らかでない。課題に対する裏付けが弱いので、対策の成果、効果についても測定がなされていない。

【松田委員】

- 政策につながっていったときに、納得感が得られる。

【藤原委員】

- 学力でない軸を縦軸におかないと、旧学力論に戻ってしまう。OECDの基準を引用すればいい。
- 具体的な子どもの姿は、相当いい線いつている。これらはOECDが言っていることに入っている。「自立貢献できる子」

【仲川市長】

- 今の学力・学習状況調査と、PISA型の調査の物差しの違いについては、どれくらいのものなのか。

【藤原委員】

- 基礎と活用。活用はPISAに向かっていくものだったが、正解がある前提の応用問題になってしまった。PISAも最初はいい問題があったが、採点が大変。だから正解主義に戻った。

【仲川市長】

- 国がやっているような調査と同じような内容を奈良市としてやっているが、必要な物差しにはなっていないのか。一番いいのは、国のような調査と、PISA型の調査の両方をやることなのか。

【藤原委員】

- 国がやる調査は、情報処理力の応用にまでしかない。それは採点の仕方を変えて、費用をかけないと無理。
- 市長が言っていることを調べようと思うと記述式しかない。それ（採点）を効率的にやる方法を考えるのなら、奈良市が独自でやった方がいい。

【松田委員】

- 調査の意味合いには二つあって、一つは説明責任。もう一つは、日々やっている教育が、理想に近づいているか、課題解決につながる一歩目。
- 日々、教員がPDCAサイクルを回していけるようなものを設計できればいい。単に学力を測るだけでなく、教育目標を実現できるかどうかも見えるものだといひ。

【柴崎委員】

- この取組は素晴らしい。画期的である。
- 一般企業人としての立ち位置からすると、奈良市がどんな方向に行きたいのかわからない。ここに挙げられているのは、どこの市でも言っている。この中で、奈良市としてどこにフォーカスするのか。はっきりしたビジョンがあると、どこからやっていくが見える。
- どんな野球チームにしたいのか、どこで目立ちたいのかが必要。
- このままだと、導入ハードルが低いものから始めましょう、となってしまう。
- われわれ委員が好き放題提案するフェーズではない。市長や教育長が、こういった教育をしたい、というところを聞いたうえで議論が必要。
- 教員を束ねるマネージャー的な、スーパーバイザーを教育する必要がある。経営者の意識を変える。
- 奈良市としてのブランディング。日本中から、優秀な人材が奈良を目指してくることを目指す。そのために、広報的な取組、メディアの活用が大切。
- 中期計画が欲しい。「こういう方向に進みたいから、こういう時間軸で、こういうものを、こういう予算で導入していきます。」

【藤原委員】

- 能力に応じて、全員が出塁する。地味なんだけど出塁率が高い、っていう方が、市長の言っていることにあう。
- 「全員がグローバル」って言っているが、本当にそうなのか疑った方がいい。それより、外国人が寄ってくるような子どもを目指した方が合っている。うまくアピールすればできるのではないかな。

【藤沢委員】

- 海外から来てもらうっていうことを、真剣にやらないといけなひ。
- 奈良の国造りについて、長老に語っていただいた。安全保障や教育、どうやったら攻め込まれないか。そのためには、全員が共通のビジョンを持つこと。リーダーは権力ではなく、権威を持つ。
- 外国人と共に学ばせると、外国の人が驚く場面がある。

【仲川市長】

- これまでは、観光できている外国人の方に「ハロー」という語りかけしかできていなかったが、なぜ彼らが長旅をしてまで奈良にやってくるのか、というような深い所がわかれば、アイデンティティにもつながるし、学びのモチベーションにもなるし、自分のキャリアを考える時に広い視点で自分がどうありたいのかっていうことのイメージができる。

【藤原委員】

- 国分寺を作って、人を送り込んでいった。この歴史にならって、教員養成率を高める。奈良で養成された人が全国に出て行く。先生になりたい人を増やす。
- 千年前、奈良がやっていたことを、大見得をきってやっていく。

➤教員がイキイキしていれば、教員になりたい子は増える。

【松田委員】

➤教育センターの内容になってくる。

【毛受議長】

➤学びを受動的なものから、主体的なものに変えていきたい。本質の部分をどう変えていくかを明確に打ち出していくべき。

➤「おもてなしの英語」のように、海外の人が奈良に来たくなるような作品を出していく。

(4) まとめと、次回の議題について

【毛受議長】

➤各プランは、授業の在り方を変えるために打ち出されるべきである。

➤打ち出すところとして、四角で囲んでいる内容でいいのかどうか、各委員から伺いたい。

➤授業を変えるための目玉は、タブレットかなと思っている。

【藤原委員】

➤インプット型からアウトプット型ということなんだけど、難しい。

【毛受議長】

➤今回の検討項目の具体的な中身についてはどうか。

【柴崎委員】

➤われわれはボールを投げたので、それについて奈良市側でもんでほしい。プランは各論になっている。大きな枠で、こういったことを目指している、が欲しい。

➤5年後、どんなチームを作るのかが欲しい。

➤外国に行かないで、呼ぶっていうのもいい。オンラインでつながるのもいい。お金をかけずに呼ぶプログラム。提携校を作る。

【藤原委員】

➤3つぐらいしか新しいことはできないし、新しいことを3つやるなら、3つぐらいやめないといけない。

【毛受議長】

➤松田委員とともに焦点化するところをさせていただき、第4回を迎える。

3 挨拶（奈良市教育長 中室 雄俊）

閉 会